



じょん・かいざん・ねぶちゅーん (John Kaizan Neputune)

尺八演奏家。1951年カリフォルニア生まれ。ハワイ大学で民族音楽を専攻し尺八を学ぶ。大学在学中の73年に初来日し、卒業後の77年に再び来日。京都で都山流の門下に入り、師範免許と雅号「海山」を授与される。尺八でジャズやインド音楽等を演奏し、自ら作曲や尺八の製作も

行なう。79年にアルバム『バンブー(BAMBOO/竹)』で芸術祭優秀賞受賞。他のアルバムに『法楽(DANCE FOR THE ONE IN SIX)』『カイト(KITE/凧)』『リバー・リズム(RIVER RHYTHM)』(いずれも佼成出版社音楽出版室)など多数。

語りかける本たち Books

言葉の行けないうしろ ジョン・海山・ネプチューン John Kaizan Neputune (尺八奏者)

日本を生きる外国人③ — 今橋映子の著者と語る

十一月がベストの時期

今橋 ネプチューンさんは尺八奏者であると同時にその作曲者であり、そのうえ尺八も自分でお作りになっていらっしゃるそうですね。私は今回、ネプチューンさんの『法楽(DANCE FOR THE ONE IN SIX)』(82)、『凧(KITE)』(82)、『リバー・リズム(RIVER RHYTHM)』(94)をお聴きし、なかでも今年の春に出された『リバー・リズム』はたいへんおもしろく感動しました。今日はこの後コンサート

だそうですが、年間にどのくらいコンサートをなさるんですか。

ネプチューン 百回以上ですね。今橋 すると三日に一度も……。作曲はコンサートの合間になさるんですか。作曲のために誰にも会わずに一カ月間こもるなんてできませんよね。

ネプチューン そういうぜいたくな時間がつくれればいいんですけどね。たまに演奏会や旅がなくて一週間ぐらい休みがとれると、作曲をしたり尺八をつくっています。尺八をつくるときは、山に行つて竹を掘ってきます。もう十二月も



『リバー・リズム(RIVER RHYTHM)』(佼成出版社音楽出版室、2,800円)

半ばですから少し遅くなったんですが、十一月が尺八用の竹をとるにはベストの時期なんです。ちょうど根のところに新しいタケノコがはえる前の時期は、竹が一番元気なときなんです。だから、二月とか三月にとった竹は、垣根として使つても二〜三年しかもたない。十一月にとったものなら六〜七年はもつ。この時期を過ぎると、竹のエネルギは全部タケノコに吸収されてしまふんです。今橋 すると、十一月ごろに掘つた竹ですと、それまでにたまっていたエネルギが、すべて尺八の音に注ぎ込まれる

わけですね。

ネプチューン それはうまい言い方で
すね(笑)。

今橋 尺八を演奏される方には、ご自
分で尺八をつくる方が多いんですか。

ネプチューン いや、普通は専門家が
つくります。

今橋 では、なぜネプチューンさんは
ご自分で——。

ネプチューン 既存の尺八を吹いてい
てちよつと物足りないというか、何かバ
ランスを欠いているような感じがしまし
てね。どこか、しっくりしなかった。だ
から尺八づくりを研究し、竹の専門家と
相談したりして、いまは全部自分でつく
ります。

邦楽の楽器でどんな音楽でも

今橋 私は尺八の世界は皆目わかりま
せんが、ネプチューンさんは一九七七年
に再来日されて、都山流に師事し、師範
免許をとられ「海山」という雅号までお
持ちだと聞いています。免許をとられる

ではなかなか生活はできません。新しい
ことに挑戦している若い人もけっこうい
ますが、やはり家元や師範になって弟子
に教えているほうが生活は安定しますか
らね。

今橋 そうですか。尺八を聴く層はあ
まり厚くないですか。

ネプチューン 尺八の生演奏を聴いた
ことのある人が少ないのは、非常に残念
です。それは、ひとつには教育の問題で
す。日本の伝統音楽では、「渋さ」などの
音の細かいところや音と音との「間」を
大事にする。こういった点では日本の音
楽は世界で一番なんです。その素晴ら
しさに日本人自身が気づいていないのが
悲しい。たとえば琴や三味線でも、楽器
の可能性として、現代音楽やジャズのよ
うなエキサイティングでフレキシブルな
おもしろい音をいろいろつくれるんで
す。だから、日本の伝統音楽を正しく教
えれば、非常に素晴らしい音楽が生まれ
ると思います。僕には、邦楽の楽器を使
ってどんなタイプの音楽でもつくれる自
信がありますよ。



いまはし・えいこ

(比 筑波大学専任講師 (比較文学・比較文化)。東 東
学 1961年東京生まれ。京 京大学大学院修了。都 都
大 術博士。著書に『異都 人のパリ
学 憧憬 日本人の(柏書房、渋谷・クロー
一 デル賞、サントリー 賞)』など。

のはたいへんだと思いますが、どれくら
いかかったんですか。

ネプチューン 七一年にハワイ大学で
民族音楽を専攻しまして、そのときに特
別研究として尺八の勉強をはじめたん
です。それからだんだんと尺八のとりこに
なりまして、師範免許をいただいたのは
大学卒業後に再来日してから五年ぐら
いあとです。

今橋 尺八には流派はいくつぐらいあ
るんですか。

ネプチューン 細かく見るとたくさん
ありますが、都山流と琴古流の二つに大
きく分けられます。山に登るのが好きな
人が都山流で、お金を稼ぐのが好きな人
は琴古流——もちろん、これは冗談です
(笑)。

今橋 ネプチューンさんが都山流を選
ばれたのはどんな理由からですか——山
に登るのが好きなこと以外に(笑)。

ネプチューン 特別な理由はありません
。初めて習った先生が都山流でしたの
で。とくに流派を意識したわけではなく、
装飾音符の入れ方によって吹き方は流派

今橋 琴や尺八でバッハやビバルディ
の曲をそのまま演奏するという試みは今
までもありますし、現に私も聴いたこと
があります。それに対し、インド音楽や
ジャズなど邦楽以外の音楽との接点で、
ネプチューンさんは尺八の「音」自体の
可能性に挑戦していますが、その冒険心
とその成功の質の高さに私はとても驚い

ごとに違っています。だから、譜面だけでは
尺八の極意は覚えられません。やっぱり、
先生から習わないと。生け花とかお茶の
世界と同じで家元や流派が大事なんで
す。日本では明治以来ずっと、西洋音楽
の教育ばかり重視してきましたけれど
ね。

今橋 音楽については、ことにそう言
えますね。

ネプチューン そのため、日本古来の
音楽は古くさいというレッテルを貼ら
れ、顧みられなくなってしまう。それ
でも、今日までずっと家元の伝統が守ら
れている。非常にいいことです。そうい
う古い伝統を大事にしながらししいこと
に挑戦してゆけば、生き生きした成果が
生まれると思います。

今橋 若手の尺八演奏家の間でも、ネ
プチューンさんのようにいろいろな可能
性を試している人は多いんですか。

ネプチューン 大勢いるんですが、残
念なことには、特に若い人には、あまり仕
事がないんです。邦楽はポピュラーでは
ないから、演奏活動をしたくても、それ

ています。
ネプチューン ありがとうございます。

「音楽語」がわからなければ……

今橋 『リバー・リズム』の曲の解説書
のなかで、ネプチューンさんはいへん
おもしろいことをおっしゃっています
ね。普通、音楽というのは国際語でどん
な国の人もすぐにコミュニケーション
でき、言葉で互いを理解するのは難しい
が音楽でならば簡単だ、というふうに考
えられていると思いますが、ネプチャー
ンさんはそうじゃないと言っています。
それぞれの楽器や音楽にはそれぞれのミ
ュージカル・ワーズ(音楽語)があり、そ
の音楽語が拠って立つ文化的背景を理解
できなければ音楽による深いコミュニケ
ーションはできないと。非常に感銘を覚
えました。

ネプチューン 言葉のもっている意味
ほどはつきりしていませんが、結局、音
楽の意味がわからなければ聴いていても
おもしろくないでしょう。

外務省が、海外の日本研究家のために尺八と琴の定期演奏会を催しています。「六段の調べ」とか「千鳥の曲」や、尺八の本曲の「鶴の巢籠」などを聴いてもらい、そのあとで「間」の問題など邦楽の特色と可能性を説明するわけです。すると、あるときアフリカ人が手をあげて「これが音楽なんですか、踊りはどこですか」と尋ねたんです。彼の文化的コンテクストでは、部屋のなかにただ座って聴くのは音楽とは言えないんです。みんないっしょに歌って踊る、それが音楽なんです。やはり音楽に対するアプローチとか見方はそれぞれの文化によって異なるわけで、その点がわかればわかるほど音楽は楽しくなる。

邦楽についても同じことが言えると思います。これまでの邦楽教育を改善して、邦楽の「音楽語」を理解させ聴き方を教えるようにすれば、日本人は邦楽の素晴らしさに目覚めるようになるでしょう。日本の伝統音楽は実にシンブルにつくってあります。シンブルというよりも、むしろ「渋い」といった形容のほうがあっさり。

ネプチューン どんな文化のなかにも、興味の尽きない音楽があります。僕にとっては、尺八が自らのアイデンティティであると言えましょうか。

僕はアメリカ人とか日本人とか、ことさらに意識していません。これまでの人生の半分は日本で生活しています。僕はネプチューン（海神）だから、まあ宇宙人ですかね（笑）。ただ、流派にとらわれずに尺八という伝統の世界を自由に泳ぎ回れるのも、アメリカ人だから許されているんだという気もします。

今橋 いえ、それはネプチューンさん、尺八という楽器のもっている可能性を最大限に引きだす演奏家兼作曲家だからですよ。

ネプチューン でも、その一方で、自信をもってわが道を突き進もうという気持ちも強くありますね。ジャズやインド音楽のようなものを尺八で演奏するの、僕は即興が大好きだからです。

今橋 「リバー・リズム」のなかの曲もアドリブが多いんですか。

ネプチューン 「和気」を除いた残りの

わしい。音楽としてのさまざまな可能性を秘めているから、「渋さ」に徹すること、は本当に素晴らしいことだと思います。「わび」とか「さび」というのも、いろいろな可能性をわりと切り詰めた結果生まれたシンブルな境地ですよ。たとえば、床の間。何でも置くことができるが、「空間」のほうを大事にする。それは日本文化のポイントですね。日本人は日本の伝統の良さを見直すべきです。邦楽の演奏を聴いて、その渋い音を愛してほしい。尺八の「間」を、言葉としてではなく耳を通して感じとってほしい。自分の目で見、耳で聴いて体得することがなによりも大事であり、自然なのです。

今橋 いまおっしゃったことを、私はネプチューンさんのアルバムを聴きながら味わっています。私にとって新しい世界を見せていただき、日本人として忘れていたものがあることを痛感しました。「リバー・リズム」がおもしろいと思ったのは、インドの音楽家たちとの演奏だったからなんです。彼らは、尺八に対してどんな感想をもちましたか。

十一曲は全部アドリブが中心です。

今橋 そうなんです。非常に細かく計算されているような感じを受けました。

ネプチューン 即興のほうが生き生きした演奏ができるし、楽器やメンバーの編成いかんによってまったく違う表現が生まれます。お昼ごはんはカレーとそばのどちらを食べたかによって夜の演奏の味が違うという世界が、僕は好きなんです（笑）。

今橋 そうなんです（笑）。これは私の聴いた三枚のアルバムから共通して受けた印象なんですが、ネプチューンさんの音楽は、何か明確なメッセージや哲学をことさらに伝えるためのものではない、最近よく言われる環境音楽に近いような気がしたんです。ストレスを解消するとか、変な話ですがお米がよく育つかといった形で環境音楽が注目されていることもあるようですが、環境音楽には、自然の音と楽器の音とが融合した世界にたゆたう心地良さがあると思います。ネプチューンさんの音楽は、そういう自然と楽器と

ネプチューン インドにはないような素晴らしい表現ができる楽器として、大評判でした。とくに、尺八とインドの笛の二重奏による「和気」(Quiet Essence) という曲は好評でした。インドの音楽と調和しながらも、日本の音楽の味が見事に光っていました。インド打楽器の演奏家までが、とても楽しかったと大よろこびしてくれましたからね。これはとてもうれしかった。というのは、インドの打楽器のリズムはとても複雑なので、「間」を大切に日本の伝統音楽の楽器である尺八に調和させるのはとても難しいはずなんです。だから、日本の楽器の幅広い可能性を理解してもらえたことが、なによりうれしかった。

お昼ごはんは夜の演奏が違う

今橋 尺八という日本古来の楽器を演奏しながら、クラシック、ジャズやインド音楽などにも接している——ネプチューンさんの音楽的なアイデンティティはどこにあるんでしょうか。

の触れ合いのなかでできたもののようにも感じられますね。

ネプチューン そういうふうには聴いてもらえれば、とてもうれしい。楽しい音楽が不真面目なものとは言えないし、聴きやすい音楽だからといって底の浅いものとも言えない。僕としては、軽く聴いても深く聴いても楽しくなるような音楽をつくりたいと思っています。つまり、自分でも聴きたいような音楽をめざしているんです。

僕のつくったCDに、「ワーズ・キャン ト・ゴー・ゼア (WORDS CAN'T GO THERE)」というタイトルの、全曲尺八のソロというのがあるんです。尺八には、文字どおり「言葉の行けないところ」があるんです。

今橋 実にポエティックで、いいネーミングですね。

ネプチューン 尺八の音は人間の声と同じように実に変化に富んでいるから、なかなか真似しにくい。そういう意味では、自然に近い音であることは確かですね。

といつても、尺八の音は竹以外では出ないというわけではない。プラスチックでつくったものでも同じ音は出る。ガラスでも鉄でも技術的には可能です。では、なぜ僕がそうしないか。竹が好きだからです。

夢はグループ「竹竹」

今橋 最後に、今後のお仕事としては、どんなことを考えていらつしやるんですか。

ネプチューン 竹だけしか使わない楽器編成のグループをつくるのが、いまの僕の夢なんです。グループ名は、竹という言葉を繰り返して「竹竹」(笑)。もちろん尺八が中心になりますが、たとえば打楽器のマリンバなども竹ならば、カイキイというハワイのベース楽器も竹でつくる。すべて竹だけの楽器で演奏すれば、考えられないような深い音楽ができるのではないかと期待しています。

この間は、サヌカイト(讀版石)という石で尺八をつくり、イタリアにあるゴシ
(Words can't go there) が、この世界にはあるのだろう。
とはいえ、そういうネプチューン氏が、日本人たちにとって今や近くて遠い存在である尺八という楽器について、「綾」「渋さ」「味」「間」などという微妙なことを、慎重に選んで、愛情をもって語ってくれたのも事実であった。氏は「リバー・リズム」の解説でこう書いている。「なぜ、インドでレコーディングをするのでしょうか? それは、多くの偉大な音楽家や楽器がインド伝統にあり、また、違う「言語」を話す音楽家と仕事をする

ことが私は大好きだからです。音楽は、国際語とよくいわれますが、そうではありません。世界のどこにも音楽があるという点と、音楽が音の連続で「文」を構成しているという点においては国際語でしょうが、その音楽の原語が、どのように組み合わせられているか、またその文化的背景は…、などといった意味を理解しなければ、音楽語でのより深いコミュニケーションはとれません」

よく考えてみれば明治以来、日本の「西

ック建築の教会で演奏しました。音色は竹の尺八とあまり変わりませんが、石の楽器の音が石の壁にぶつかって奏でる音色は、何ともいえぬほど心地よいものでした。だから石の楽器しか使わないロックバンドのようなものもつくってみたい。石も竹も、アイデアとしてはおもしろいでしょう。

楽器によってできる表現とできない表現はつきりあるんで、まずは使用する楽器を決めなければならぬ。でも、楽器が決まる前に、サウンドのほうはすでに頭のなかでできあがっているんです。そういう夢を実現するには、時間もエ

〈対談を終えて〉

私にとって全く異なる領域、ことに「言語」を用いない表現にかかわっている方との対話には、言い得ぬ深みがある。このコーナーでは、「著者」の概念を拡大して、音楽、美術などの「作者」の方々も、とりあげたいと思った。ジョン・海

欧化」が、ほぼ百パーセント行きわたってしまったのは、実は音楽の世界かもしれない。クラシック、ジャズやロックに至るまで、「日本人は技術的には高いが、その精神の根本はつかみ得ない」と言われ続け、またそのように自己分析し続けてきた。つまりネプチューン氏のいう「音楽語」の理解に心血を注いできたと言つても良い。それは、西欧の文学、思想を学ぼうとした者たちと、全く同じ苦労だったに相違ない。そのおかげというべきか、現在では、例えば「オルケスタ・デ・ラ・ルス」のようにサルサの本場でさえも、熱狂的に愛好される日本人ミュージシャンたちが活躍する時代になった。

ところがその逆に、私たちはいつの間にか、日本音楽の伝統的語法について「異邦人」になってしまったようである。ネプチューン氏は、例えば尺八の「本曲」(江戸時代の虚無僧の吹いた典型的な尺八ソロでフリーなリズムの日本式五音階スケール)のもつ悠久な調べと、そこに織り込まれる綾や渋さが意味するものを理解できるよ

ネルギーも必要です。あまり時間をかけると商売になりませんが、やはり、やりたいことにエネルギーをかけないといけない曲はできません。

今橋 じゃあ、来年には「竹竹」の演奏をコンサートかCDでお聴きできるでしょうか(笑)。

ネプチューン どうでしょう、できると思いますね(笑)。

今橋 音楽は「音を楽しむ」と書きますが、ネプチューンさんは文字どおり、音を本当に自由に心の底から楽しんでいらつしやるんですね。ありがとうございました。(一九九四年十二月十七日収録)

今橋映子

山・ネプチューン氏が、対談の合間に何回か、いかにもどかしげに「こうして色々お話しするより、尺八を一吹きした方が、よほど解つてもらえるのですけどね」と、おっしゃったのが実に印象的だった。確かに「ことばの行けない処」

うになれば、「邦楽や雅楽の演奏会は、決して眠たい時間にはならないはず」と、指摘された。氏は、尺八の伝統的奏法が、この楽器の無限の可能性をわざと切り詰めて、シンブルな形に徹していることを愛し、その上で、尺八の伝統的語法を、いわば一度解体し、クラシック、ジャズやインド音楽と互いに挑発しながら織り上げる新しい「音」の世界を再構成している。そこでは、音楽の世界ならではの「即興」という技法が、自由闊達に駆使され、しかも聴く者にとっては、実にのびやかな時間が広がっているのである。

対談の中で、ネプチューン氏は、「軽く聴いても深く聴いても楽しくなるような音楽をつくりたい」と、大変に含蓄のある言葉を残してくれた。自らの中に湧き出てくる音楽の泉を、どんな楽器で、どんなスタイルで、これからも聴かせてくれるのか、本当に楽しみである。そしてまた、こうして邦楽の「聴き上手」が増えていくことが、邦楽を邦楽の枠の中だけにとどめさせず、若手の自由な演奏活動を促す確かな力になるのかもしれない。